

# 『小学国語読本』の教材「稲むらの火」をめぐって

(1)

府 川 源一郎\*

A Consideration of "INAMURA NO HI" in  
"SHOUGAKU KOKUGO TOKUHON"

Gen'ichiro FUKAWA\*

国定国語読本の第四期目に当たるのは、1933（昭和8）年から使用され始めた『小学国語読本』（通称・サクラ読本）である。この読本は、それまでの国語読本から大きく飛躍した出来上がりになったと、高く評価されている。多色刷りの挿し絵が入ったという外形上の特徴もあるが、なによりも井上超監修官を中心とする教科書編集の基本的な方針が支持されたのである。すなわち、教科書編集に当たって、できるだけ児童の側に立とうという発想をとったこと、すぐれた文学的文章を数多く掲載しようとしたことなどに、多くの賛意が集まったのだ。もちろんその背景には、大正デモクラシーで豊かに花開いた児童文化運動の影響があり、世界的に展開したいわゆる新教育運動の反映があった、と考えることができる。

ところで、この『小学国語読本』巻十（五年生後期用）には、「稲むらの火」という教材が掲載されている。この教材を学んだ子どもたちにとっては、かなり心に残る内容だったらしく、その後「サクラ読本」が話題になる際には、たびたび教材「稲むらの火」への言及がある。また、現在でもときどき、この教材を「防災教材」として役立てることはできないかという発言が散見される。

本稿は、この「稲むらの火」という教材が、なぜ当時の子どもたちの心に残る教材となったのかを探る中で、第四期国定国語読本『小学国語読本』の位置や、この教材の与える感動の特質を様々な角度から考えてみようとするものである。

## 1. 教材文「稲むらの火」

まず、『小学国語読本』巻十に掲載された教材「稲むらの火」の全文を、以下に示しておく。ルビは省いた。

## 稲 む ら の 火

「これは、たゞ事でない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。今の地震は、別に烈しいといふ程のものではなかった。しかし、長いゆつたりしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない無気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下した。村では、豊年を祝ふよひ祭の支度に心を取られて、さつきの地震には一向気がつかないもののやうである。村から海へ移した五兵衛の目は、忽ちそこに吸附けられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、見る見る海岸には、廣い砂原や黒い岩底が現れて来た。

「大變だ。津波がやつて来るに違いない。」

と、五兵衛は思つた。此のまゝにしておいたら、四百の命が村もろ共一のみにやられてしまふ。もう一刻も猶豫は出来ない。

「よし。」

と叫んで、家かけ込んだ五兵衛は、大きな松明を持つて飛出して来た。そこには、取入れるばかりになつてゐるたくさんの稲束が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。」

と、五兵衛は、いきなり其の稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつと上つた。一つ又一つ、五兵衛は夢中で走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、松明を捨てた。まるで失神したやうに、彼はそこに突立つたまゝ、沖の方を眺めてゐた。

日はすでに没して、あたりがだんだん薄暗くなつて来た。稲むらの火は天をこがした。山寺では、此の火を見て早鐘をつき出した。

「火事だ。莊屋さんの家だ。」

と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。續いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追ふやうにかけ出した。

高臺から見下してゐる五兵衛の目には、それが蟻の歩みのやうに、もどかしく思はれた。やつと二十人程の若者が、かけ上つて来た。彼等は、すぐに火を消しにかゝらうとする。五兵衛は大聲に言つた。

「うつちやつておけ。——大變だ。村中の人に来てもらふんだ。」

村中の人、追々集まつて来た。五兵衛は、後から後から上つて来る老若男女を一人々々数へた。集まつて来た人々は、もえてゐる稲むらと五兵衛の顔とを、代る代る見くらべた。

其の時、五兵衛は力一ぱいの聲で叫んだ。

「見ろ。やつて来たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。其の線は見る見る太くなつた。廣くなつた。非常な早さで押寄せて來た。

「津波だ。」

と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前に迫つたと思ふと、山がのしかゝつて來たやうな重さと、百雷の一時に落ちたやうなとゞろきを以て、陸にぶつかつた。人々は、我を忘れて後へ飛びのいた。雲のやうに山手へ突進して來た水煙の外は、一時何物も見えなかつた。

人々は、自分等の村の上を荒狂つて通る白い恐しい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退いた。

高臺では、しばらく何の話し聲もなかつた。一同は、波にゑぐり取られてあとかたもなくなつた村を、たゞあきれて見下してゐた。

稲むらの火は、風にあふられて又もえ上り、夕やみに包まれたあたりを明るくした。始めて我にかへつた村人は、此の火によつて救はれたのだと氣がつくと、無言のまゝ五兵衛の前にひざまづいてしまつた。

## 2. 「稲むらの火」をめぐる評価

前述したように、『小学国語読本』の第一巻、つまり小学校一年生用の教科書が使用され始めたのは、1933（昭和8）年のことである。（刊行は、前年の12月。）サクラ読本は、学年進行で作製されていったので、「稲むらの火」の載っている巻十（小学校五年生後期用）は、サクラ読本を初めて使った一年生が、そのまま進級して五年生になったとき、すなわち1937（昭和12）年の秋から、使われたことになる。なお、刊行日は、同年の7月11日だった。

この教材は、続けて改訂されたアサヒ読本（五年生用は、1943・昭和18年から使用）にも引き続いて掲載された。両者の教材文の間には、若干の異同はあるが、ほとんど同文である<sup>①</sup>。アサヒ読本は、太平洋戦争敗戦の年まで使われたから、1945（昭和20）年に五年生だった子どもまでは、国定読本でこの教材を習ったことになる。

まず、この教材をめぐる評価のいくつかを見ておこう。

初めに、実際に教壇に立ってこの教材を教えたこともある、鈴木道太の発言を紹介する。彼は、戦前の生活綴方運動の推進者として知られ、1950（昭和15）年、治安維持法違反で検挙されている。いわゆる「綴方教室事件」による逮捕である。したがって、鈴木は、戦前の国家主義的な教育に対しては、ある程度批判的な目を持っていたと考えられる。もっとも、戦後になって「国定読本」の教材を振り返った『ああ国定教科書』という本には、「怒りと懐かしさをこめて」という、反発と同時に懐古的な感情を表す副題がつけられていた。その理由を、彼は、こういっている。昔、子どもたちに教えた「尋常小学読本」「小学国語読本」を見ると、「嫌悪より先に郷愁がわいてくる」と。そして、それは「おそらく私の持っていた左翼思想が多分に心情的なものであり、理論的な武装が甘いからではな

いか、と自省してもいる。鈴木にとって、国定教科書、あるいは戦前の教育は、観念的には全否定すべきものだった。しかし、懐旧の情に流されてしまう傾向を自分が持っていることも自覚している。その彼が、この教材に、次のような評価を与えている<sup>(2)</sup>。

「稲むらの火」などは戦前教育紙芝居などにつくられ子どもたちにあたたかい感動を与えたものであるが、それは主人公の五兵衛が村人の生命のために、農民がもっとも大事にしている自分の稲を燃やしつくした犠牲があったからである。

稲は百姓にとって一年の汗の結晶である。こんにちのような農機具の発達していなかった昔は、それこそ粒々辛苦、汗の結晶である。それを五兵衛は火に焼いた。自分の持田の稲むらのすべてに火を点けた。津波の予感五兵衛の経験と生活の知恵であろう。しかし、早鐘をつくくらいでは村民のすべてを高台に集める手段はない。五兵衛は自分の、いわば百姓の宝を灰燼にすることによって村人全体のいのちを救ったのである。文章も簡潔で、くどくどした五兵衛への感謝の言葉などを書いていない。

鈴木は、この教材を、私利私欲を捨てて人名を救った「ヒューマニズム」の物語と読んでいる。とりわけ農民の重要な生産物である「米」を犠牲にしたことへの深い共感、宮城県の農村の生活をよく知っていたことから生まれたものであろう。鈴木はこの教材文への評価は、「あたたかい感動を与え」るものとして、きわめて高いといい。それは、戦前から一貫して変わらなかったもののようだ。全体的には否定の対象である「国定読本」の教材の中でも、これは「ヒューマニズム」の文学として、位置づけられ、肯定的に評価されているのである。

一方、国民学校でこの教材を教えられる側だった粉川宏は、『サクラ読本』の巻一〇について、こんな感想をもらしている<sup>(3)</sup>。

巻十には、この「水兵の母」を初めとして“感動物語”とでも称すべき読み物が、数多く見られる。何が“感動”か？ 内容は、列举してみると、次の如くである。第九 柿の色（簡単な教材内容の説明があるが省略・以下同じ／筆者注）、第十 稲むらの火、第十三 久田船長、第十四 母の力、第二十一 国法と大慈悲。

感動物語——と、書いた。だがこれらの物語群を、そのように受けとめるのが、日本の古い世代であることを、私は知っている。

新しい世代には、新しい世代の解釈というものもあるだろう。ともかく、これらの物語群を、現代の日本に持ってきて、そのまま置いてみるといい。たとえば、テレビドラマとして、放映してみるがいい。

その反響の程度は、目に見えるようであるが、人間的感動というものが、時代を超え、国を超えて、果たして普遍的なものであるのかどうか、私にはよくわからない。

それにしても、現代の目で見ると、なんと反時代的な物語に見えることだろう。

そういつて、粉川は、その“感動物語”の代表的な例として「稲むらの火」の全文を引

用する。粉川は、戦後になってからは、批判され、否定されるばかりだった国定教科書を、あらためて見直そうという立場から、この文章を書いている。したがって、ここでの彼の主旨は、一見「反時代的」に見える国定読本の“感動物語”でも、今の人々に十分感動を与えることができる、ということだと思われる。“感動物語”の主人公は、自分を越えた大きなもののために、私欲を捨て、命を懸ける。その純粹さ、一途さが人の心を打つのである。それは、いつの時代でも同じではないか、と粉川はいいたいのであろう。戦後、あまりにも個人のエゴがむき出しになったように見える世相に対して、これらの教材が何かを語っていないか、というのが粉川宏の立場である。過去の国定教科書を「全否定」するのではなく「継続すべきもの」としてとらえたいという彼の視点が、「稲むらの火」に代表されるこうした教材群に“感動物語”という高い評価を与えることになる。

鈴木と粉川とは、思想的には対極にあるようにみえながら、ともにこの作品に、ある種の感動を覚えていることは間違いない。その感動の内実をどのように対象化し、記述するか、という点に二人の違いがあるのだ。確かにこの教材では、五兵衛が村人の命を助けるため、瞬時の判断で私財をなげうち、それによって目的を達成したことが書かれている。それは、人間として、まことに気高い行為だといわなければならない。その行為が読み手に、ある種の「感動」を与えることは認められる。

しかし、その「感動」は、はたしてどこから生まれてくるのか、そしてその「感動」が、なぜ「国定読本」という意図的な印刷物の中に仕組まれているのか。その背景を、もう少し掘り下げてみる必要がある。それは同時に「小学国語読本」という書物の特質をはっきりさせる作業とも重なるだろう。

### 3. 文部省による教材公募

一時代を画した『小学国語読本』には、主幹であった井上超が筆を執った教材文が多数収録されている。しかし、「稲むらの火」は、彼自身が書き下ろした教材ではなかった。これは、文部省の教材公募に応じて採用された作品だったのである。

1933（昭和8）年、文部省は、全国小学校教員を対象に、国語と修身の教材を公募した<sup>(4)</sup>。断定はできないが、国定読本への一般からの教材の公募は、この時が初めてだったのではないだろうか。この試みは国定教科書を、外へ向けて開かれたものにしようとした努力の一端として評価できる。『文部時報 第四百六十二号』（昭和八年十月二十一日発行）の彙報欄に、その時の公募文が掲載されているので、関係部分を抜き出してみよう。

#### ○尋常小學修身書及小學國語讀本（尋常科用）資料募集

文部省ニテハ尋常小學修身書及小學國語讀本（尋常科用）資料ヲ募集ス

其ノ要項左ノ如シ

一、募集資料ヲ分チテ甲號、乙號ノ二種トス

甲號（修身の教科書の公募内容・ここでは略／筆者注）

乙號

小學國語讀本（尋常科用）卷四乃至卷十二ニ収ムル (イ)韻文、(ロ)書翰文、(ハ)其他一

## 般ノ教材

- (1) 應募者一人ノ應募篇数ハ (イ) (ロ) (ハ) 各四篇以内トス
- (2) 人物ヲ主題トスルモノニ就キテハ其資料ノ出所ヲ明記スヘシ
- (3) 現ニ生存セル人物ノ傳記ヲ主眼トスルモノハ之ヲ避クヘシ
- (4) 文體ハ第四學年用以下ハスヘテ口語體トス

## 二、應募期間ハ本年十一月三十日マテトス

(中略・応募にあたっての書式の注意など、賞金額も明示してある／筆者注)

## 十三、入選シタル文章ノ著作権ハ當省ニ属スルモノトス又該文章を使用スル場合ニハ當省ニ於テ適宜之ヲ修正スルコトアルヘシ

## 十四、應募文ノ原稿ハ一切之ヲ返付セス

繰り返すが、『小学国語読本』は、1933(昭和8)年の4月から使用され始めた。が、それは上巻、すなわち巻一だけのことで、下巻(巻二)は、その時には、まだ世に出ていなかった。一年生の後期から使われる下巻(巻二)は、同年7月に刊行されることになる。以後、文部省の監修官は、半年に一冊というペースで本を作っていく。国定読本という性格上、それはかなり神経を使い、しかも遅延の許されない厳しい仕事であったことは、容易に想像がつく。とりわけ読本に適した材料を蒐集し、学習者である子どもの反応を想定して、それを教材文として仕立て上げる作業は、限られた期間と人数では、困難をきわめたであろう。

文部省が、なぜ下巻(巻二)を刊行し終えたこの時点で、あらためて教材の公募に踏み切ったのか、その詳細については、よくわからない<sup>(6)</sup>。しかし、新しい教科書のために、広く教材の候補を募ろうとした積極的な意志は感じとれる。もっとも公募広告を出した昭和8年10月の時点では、既に第三巻(二年生前期用)の編集は、ほとんど済んでいたものと思われる。実際、第三巻は、その翌年の2月に刊行されているから、公募の締め切り日である11月末日に原稿が到着しても、それをすぐに審査して第三巻に入れることは、時間的にも不可能だろう。したがって、公募要項で、それ以降に製作する第四巻から第十二巻までに掲載する教材文に限ったことは自然である。

また、付帯条件として挙げられている、原拠のあるものはそれを示し、現存する人物の伝記を避けるという項目も、当然の注意事項だろう。当時は、国定読本に取り上げられた素材についての原拠研究が盛んだった。したがって、原拠があるものについて、それを明示しておくことは、無用の混乱を避けるための重要な条件であった。また、現存の人物や最近の事件を取り上げた場合、教材の文章と事実との関係が様々に問題になったこともある。例えば、第三期国定読本『尋常小學国語読本』の有名教材「一太郎やあい」の場合は、教材文に書かれた人物像と、モデルになったとされる人物の現実生活との相違が様々に報道され、それが原因で、教材文を教科書から降ろさざるを得なかったという苦い教訓があった<sup>(6)</sup>。現存の人物についての教材化を避けようとしたのは、文部省としての当然の配慮であろう。

だが、その応募期間については、いささか疑念が残る。というのは、告知から締め切り

までの期間が、わずか一ヶ月強しかないからだ。これは、応募する側にとっても、いかにも急な話と受けとめられたのではないだろうか。もちろん、常日頃、そうした問題意識を持ち、なおかつ具体的な材料を用意していた者にとっては、千載一遇のチャンスではあっただろう。が、短期間にそううまく材料が集まるものか、少々心配にもなる。試みに当時の国語教育雑誌をいくつかのぞいてみたが、この文部省の教材公募を話題にしている記事は見当たらなかった。国語教育界では、この企画に特段の反応はなかったのかもしれないし、それをしようにも国語教育関係の雑誌はほとんどが月刊誌なので、この急な話にうまく対応ができなかったと考えるべきなのかもしれない。

#### 4. 入選作と「小学国語読本」掲載教材

しかし、実際には「文部時報」の威力は絶大だった。この「資料募集」に対して、かなりの応募が、全国からあったようだ。その結果は、同じ「文部時報」の第480号（昭和9年5月1日号）に載せられている。そこに掲げられた「教科書資料入選者」によると、『尋常小学修身書』には、20篇（賞金50円・4名／30円・4名／10円・12名）が、また『小学国語読本（尋常科用）』には、なんと53篇（46名）が入選を果たしている。入選作が53篇もあったということは、選に漏れた数を考えあわせれば、相当数の応募があったということだ。教材資料公募の企画は、多くの投稿者を得たという点で、ある程度成功したといっていいただろう。

その入選作53篇を、次に掲げてみる。（なお、作品に付された印は、筆者による。○が、同じ題名が『小学国語読本』にあるもの、あるいは間違いなく読本に採用されたもの。\*が、同じ題材に重複して応募があったもので、どちらが採用されたか不明のもの。?が、『小学国語読本』の教材名と応募題とは異なっているが、たぶん公募による作品だろうと推測されるもの。#が、修身の教科書の題材と重なるもの。）

##### （一般教材）

##### 五十圓

○「スキー」 長野県北佐久郡北御牧尋常高等小學校 中澤 誉勝

##### 三十圓

○「百合若」 大分県別府市北尋常小學校 岩田 静馬

\*「兄さんの入營」 岩手県紫波郡星山尋常小學校 藤原 アイ

\*「足助重範」 愛知縣東加茂郡阿蔵尋常高等小學校 鷹見 勉

#「通潤橋」 熊本縣上益城郡六嘉村 高野 直之

「驛傳競争」 東京市立大原尋常小學校 松田伊勢次

○「船長久田佐助」 東京市中野區南沼袋一丁目 加藤 精

?「名人元日を知らず」 静岡縣濱名郡鷺津尋常高等小學校 牧野 茂

?「海賊と笛」 秋田縣鹿角郡花輪町 鎌田喜市郎

「正ちゃん」 京都市左京區下鴨芝本町 上島信三郎

##### 十圓

- 「津浪美談」 和歌山縣日高郡南部尋常高等小學校 中井 常藏  
 \*「兄さの入營」 徳島縣那珂郡見能林村 樋上 傳吉  
 「明治天皇と山縣少佐」 東京市立御田尋常小學校 宮永 英一  
 #「氏神の祭」 三重縣一志郡倭尋常高等小學校 辻本 又造  
 ?「海幸山幸」 同 同  
 「スキー遠足」 札幌市南十四條西八丁目 笠井 廣吉  
 ○「稲刈」 滋賀縣神崎郡旭村 中島 覺一  
 「大山將軍」 東京市麴町區上二番町 若林 旭郎  
 「乃木將軍」 大分縣北海部郡臼杵町 佐藤 大吉  
 \*「足助重範」 愛知縣東加茂郡築羽尋常高等小學校 寺部 政一  
 「我が祖先と君が代」 静岡縣田方郡三島東尋常高等小學校 小田切信夫  
 「年トリ」 茨城縣東茨城郡川根尋常高等小學校 海老澤鶴吉  
 ?「納税」 愛媛縣周桑郡庄内尋常高等小學校 森田 武  
 「お宮掃除」 愛媛縣新居郡大保木尋常高等小學校 青木 政憲  
 ○「御民われ」 大阪府立今宮中學校 久保 文治  
 「取入れ」 新潟縣中魚沼郡白倉尋常小學校 關 省吾  
 ○「山羊」 富山縣新川郡立山村 野島 茂義  
 ○「朝鮮」 京城府櫻井町二丁目 川村 光也  
 「心の記念日」 鳥取縣日野郡神奈川村 浦部 道郎  
 「加賀の千代」 三重縣河藝郡神戸町 服部 愛子  
 ?「朝顔」 川越市大字小仙波 田中 初次  
 「天国への凱旋」 静岡縣駿東郡富士岡尋常高等小學校  
 「白い煙黒い煙」 堺市大濱北町 稲垣國三郎  
 ?「雪の日」 京都市左京區下鴨芝本町 上島信三郎  
 ?「賣られて行った馬」 東京市杉並區天沼三丁目 堀田 静  
 「新學年」 奈良市北半田中町 秋田喜三郎  
 ○「國語を愛し尊べ」 同 同  
 (韻文)
- 五十圓  
 「街の十字路」 東京市小石川區白山御殿町 原島 好文  
 「ぶらんこ」 熊本縣下益城郡阿江村 吉川 辰雄
- 三十圓  
 「晩春の古都」 大阪府立今宮中學校 久保 文治  
 「苗賣」 東京市小石川區白山御殿町 原島 好文  
 「登山」 秋田縣鹿角郡花輪町 鎌田喜市郎
- 十圓  
 「水たまり」 徳島縣女子師範學校附属小學校 森本 安市  
 ○「母馬子馬」 東京市本郷區曙町 林 俊則



|           |                   |       |
|-----------|-------------------|-------|
| 「山雀小雀」    | 東京市江戸川区金町二丁目永妻亀吉方 | 鈴木 孝  |
| ？「春雨」     | 北海道空知郡鹿越          | 後澤 重雄 |
| ○「早春」     | 大阪府立今宮中學校         | 久保 文治 |
| ○「狸の腹づつみ」 | 和歌山縣有田郡廣尋常高等小學校   | 田邊 善一 |
| 「菅公」      | 山形縣酒田市外關尋常小學校     | 上野源治郎 |
| 「肉弾三勇士」   | 大野郡北郷尋常高等小學校      | 笠松 一夫 |
| 「觀月二題」    | 千葉縣山武郡豐成村         | 桑田 正  |
| 「野茨」      | 静岡縣濱名郡知波田村        | 石田徳太郎 |
| (書翰文)     |                   |       |

## 十圓

|                  |           |       |
|------------------|-----------|-------|
| 「姉に演習の模様を知らせる手紙」 | 茨城縣眞壁郡伊讃村 | 大瀧 晴子 |
|------------------|-----------|-------|

もっとも、これらの入選作が、『小学国語読本』の教材文として、そのまま使えるかどうかということになると、それはまた別の話である。というのは、内容はもちろんのこと、文章や語句を、教科書の体系に合わせて調整しなければならないからである。どの入選作品を教材化するにしても、監修官が何らかの手を入れているはずである。また、「文部時報」の「教科書資料入選者」に示されたのは、題名と応募者名だけなので、入選作のうちどれが実際に、教科書に掲載されたのかは、推測するしかない。が、たぶん入選作53篇の内、少なくとも22篇は、実際に教材化されて『小学国語読本』に採用されたのではないかと思われる<sup>7)</sup>。巻四から巻十二までの教材総数233編のうち、井上赳自身が執筆したものは、86編だとされているから、約1/3は、彼が書いた教材である。その他、『尋常小学読本』から引き継いだ教材もかなりあるし、他の監修官(佐野保太郎、大岡保三、各務虎雄)も教材文を作成しているはずである。公募で採用された数が筆者の推測通り22編だとするのなら、巻四から巻十二までの教材総数の内、約一割である。この数字を、多いとみるか少ないとみるかは、人によって評価が分かれるだろうが、それほど少ない数字ではない。

なお、『小学国語読本』に教材化されただろうと筆者が推測した22編は、次のような教材である。( )内で「」でくくったのは、応募題。

- 巻四 6「たぬきの腹づつみ(韻文)」 14「ニイサンノ入営」 18「百合若」
- 巻五 8「青葉(韻文)」(「春雨」?) 25「二つの玉」(「海幸山幸」?)
- 巻六 5「稲刈」 7「山羊」 16「雪の夜」(「雪の日」?)
- 巻七 9「笛の名人」(「海賊と笛」?) 11「朝顔の日記」(「朝顔」?)  
15「五作じいさん」(「納税」?)
- 巻八 14「自動織機」(「名人元日を知らず」?) 16「スキー」 25「早春(韻文)」
- 巻九 20「僕の子馬」(「賣られて行った馬」?) 21「母馬子馬(韻文)」  
28「国語の力」(「国語を愛し尊べ」)
- 巻十 4「足助次郎重範(文語文)」 18「稻むらの火」(「津波美談」)  
11「朝鮮の田舎」(「朝鮮」) 14「久田船長」(「船長久田佐助」)  
27「御民われ」

繰り返すようだが、「教科書資料入選者」には入選作品の表題名と、氏名だけしか公表されていないので、実際の公募内容全体の傾向がどのようなものであったかは知りようがない。しかし、入選題をざっと見ただけでも、ある程度、公募者や文部省が、国定読本の教材というものをどのように考えていたかということが推測できる一面もある。そうした視点で、もう一度、入選作53篇の題名を眺めなおしてみる。すると、ここから、おおよそ以下のうなことが考えられるのではないか。

まず、国定読本の根幹を疑うというような傾向の教材文は、投稿されなかったにちがいない。また、もし、投稿されたとしても、それが入選作として採用されるはずもない。国定読本を疑う教材とは、天皇制や軍隊を否定したり、揶揄するような作品や、階級闘争や「個人主義」の視点からの教材のことである。結局それらは、国定読本とは全く方向を逆にしたプロレタリア系の新興教育の教材集や、「反日」「排日」教材集の中にしか登場しなかった。そういった傾向の作品がここにはないのは当然のこととしても、しかし、入選題から想像できる作品の素材の世界は、案外に狭いように思われる。というのも、入選題をおおざっぱに分類すると、日常生活を取り上げたものと、軍人や偉人のエピソードと二分されるような気がするからである。ここには、外国の話題や、ユーモアや笑い話のたぐいはほとんどない。それらは、そう数は多くなかったにせよ、これまで使われていた『尋常小学国語讀本』にも、入っていたものなのである。当時の児童文学の進展、あるいは国語副読本の隆盛などから考えれば、もっとバラエティに富んだ様々な作品題が、ここに並んでいてもいいのではないかと思われる。

今、日常生活を取り上げたものといったのは、(一般教材)では、「スキー」「駅伝競走」「稲刈」「年トリ」「納税」「お宮掃除」「取入れ」「山羊」「朝鮮」「売られていった馬」など、(韻文)では「苗売」「登山」「母馬子馬」「山雀小雀」「春雨」などである。これらは、大人が日常生活に素材を求めて書いたり、子ども自身が綴った文章であったりしただろう。たぶん、教材を作成するときに、教科書編纂で一番苦労するのが、この手の題材なのではないかと思われる。地域の風俗や生活は、実際にその地域に住んでいる人間が一番よく知っているわけだから、公募者が生活感覚を取り入れた文章を書くのはそれほど難しくない。子どもの生活の周辺を教材化しようとするなら、どうしてもそうした材料を、どこかから提供してもらわなければならない。その意味で、監修官にとって教材公募は、地域の生活を掘り起こすには、いい機会になったことだろう。そして、そうした教材は、国定読本を子どもに近づけるのにも役に立ったはずである。

一方、軍人や偉人のエピソードというのは、これも(一般教材)から挙げていくと、「百合若」「足助重範」「通潤橋」「船長久田佐助」「名人元日を知らず」「津波美談」「明治天皇と山形少佐」「大山大将」「乃木將軍」「加賀の千代」など、(韻文)では、「菅公」「肉弾三勇士」などである。これは、いわゆる「軍事教材」をも含んでいる。多くの教師にとって、当時、こういうものが国定読本の教材にふさわしいものだと感じられていたことがわかる。

ここから、『小学国語讀本』の持っていた二つの側面が、鮮やかに見て取れる。その二つの側面とは、いうまでもなく「児童中心主義」と「国家主義」である。つまり、日常生

活を取り上げた応募群からは児童の生活から出発しようという姿勢を、また、軍人や偉人のエピソードを取り上げた応募群からは精神主義的な国家主義を感じとることができるのだ。こうした国定読本の国家主義は、何も文部省だけが領導したわけではない。それは、下からも強く主張されていたのである。もっとも良い例が、(韻文)で入選した「肉弾三勇士」である。この話は、1932(昭和7年)2月、上海の廟港付近の中国戦線において、命と引き替えに敵地に爆弾を投げ込んだ「三勇士」の美談である。事件の起きた直後から、三人の壮烈な爆死は、日本中のマスコミに取り上げられ、国定教科書に取り上げるべきだという論調も広がったという<sup>7)</sup>。結局この素材は、事件から十年後になって、初めて第五期国定読本『初等科国語』(二の二一)と、同年に出された唱歌用教科書『初等科音楽』(一の二二)の両方に登場することになるのだが、その先取りが、この「肉弾三勇士」と題した応募作だといっている。観念的な国家主義は、大衆を巻き込んで、こうした応募の際に、具体的な教材の形を取って表れてくるのである。教材の応募者たちは、国定教科書に載せられるべき教材の理想像をこの事件に見ていたわけだし、それを拡大再生産するような意図を持って、応募したのである。いうまでもなく、「稻むらの火」もそうした選考基準の大枠の中で選別され、入選を果たしたのだった。

##### 5. 「稻むらの火」と中井常蔵

さて「稻むらの火」を投稿した中井常蔵とは、どのような人物であったのか。

彼は、五兵衛ゆかりの地である和歌山県の訓導で、当時二八歳の青年教師だったという。中井が、「稻むらの火」を、文部省の公募に応じて送稿した経緯については、彼自身の証言があり、二冊の冊子となってまとめられている<sup>8)</sup>。

それによると中井常蔵の略歴は、1907(明治40)年、和歌山県有田郡湯浅町生まれ。県立耐久中学校から、和歌山師範学校本科第二部へ進む。生まれ故郷の湯浅小学校の訓導を一年つとめた後、和歌山師範学校専攻科を卒業。和歌山師範附属小学校訓導を経て、昭和7年日高郡南部小学校訓導。昭和20年、日高郡切目小学校校長になるが、敗戦直後に、教職への責任を感じて依願退職。以後、家業(酒販業)に専念、ということのようだ。経歴からも、誠実で、熱心な教師像が浮かんでくるような思いがする。

この冊子にも証言があるように、「稻むらの火」は、中井による全くの創作というわけではなく、原拠があった。それは、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の作品 *Gleanings in Buddha-Fields*「仏陀の畠の落穂拾ひ」(1897)の中にある *A Living God*「生ける神」という作品である。彼が、ハーンを読んだのは、師範の専攻科に在籍していたときだったという。英語学習のテキストで「ラフカディオ・ハーン集」を使用し、その中に *A Living God* が載せられていたのだ。それを読んで、郷土の偉人の言動に深く打たれたらしい。

その後中井は、南部小学校に勤務していたとき、文部省が教材資料を募集していることを知り、さっそくハーンの原文をもとに、教材文を作成して投稿したというわけである。したがって、この教材はハーンの原文の翻作だということになる。どこが中井のオリジナルなのか、またハーンの原作がどのように生かされているのかを知るためには、両者を比べてみる必要がある。

原典になった *A Living God* 「生ける神」というハーンの作品は、現在、『全訳 小泉八雲作品集』平井呈一訳・恒文社・1964（昭和34）年刊、などで容易に見ることができる<sup>(9)</sup>。そこでの邦訳題は「生神（いきがみ）」となっている。文種はエッセイといってよく、全体が大きく三つの部分から構成されている。

初めの段落では、日本における神の様態の特徴が語られる。日本の神は「自然」と一体化しており、また存命中の人が祭られることもあるということが指摘されている。さらに次の段落では、日本の村落の相互扶助の規約について述べられ、とりわけ出火の際には、全員が応援に駆けつけることが義務であったことが強調される。ここまでは、五兵衛の話を引き出すための布石だといっている。

いよいよ最後の段落で、浜口五兵衛のエピソードが語られる。その大筋は「稻むらの火」とほぼ同じであるが、分量は教材文のおおよそ五倍ほどある。教材文で切り捨てられた主な部分としては、次のような記述があげられる。まず、日本における津波被害についての説明である。これは日本人の読み手はよく知っていることだから、当面は必要がない。さらに、その時家にいたのは五兵衛と孫との二人で、実際に稻むらに火をつけたのは孫であることや、二人の会話も捨てられた。また、情景や人々の言動の描写やその説明も、当然、原文の方が詳しい。「稻むらの火」では、これらが簡略化されている。しかし、教材文は、原文をうまく焦点化して、要領よく、また感動の質を落とさないで刈り込んである。むしろ、ハーンの原文の方に、冗漫な解説が目につくほどだ。その点で、教材「稻むらの火」の方が、すぐれた文章表現として仕上がっているという言い方をしてもいいかもしれない。

ハーンの原文では、さらにこの事件の後日譚が語られている。つまり、稻むら焼却事件のあった後、五兵衛は「浜口大明神」として奉られ、五兵衛神社までもが建立されたという事実が披瀝されるのだ。実は、ハーンが一番書きたかったのは、このことだった。だからこそ、その前置きとして、第一段落で、日本の神について述べておいたのである。ハーンの文章のタイトルが「生神（いきがみ）」となっているのも、それを証拠立てている。

五兵衛は、この事件によって生きながら神となり、神社に祭られた。ということは、神としての五兵衛という実在の人物の魂（精神）と、神社に勧請され、祭られた靈魂とが、分離して併存しているということになる。どちらが、本物の魂なのかというハーンの問いかけに対して、ハーンの友人は、日本の「百姓たちは、人間の心霊や魂というものは、その人が生きている間も、同時に方々にいることのできるものだと考えている」と答えたという。ハーンによれば、それこそが、西欧世界とは異なった日本の特殊な精神文化なのだ、ということになる。これが、浜口五兵衛のエピソードに対するハーンの解釈であり、意味付けだった。

もっとも、中井が典拠にしたハーンの原文、すなわち英語学習に使ったテキストにも、この *A Living God* の全文が載っていたわけではないようだ<sup>(10)</sup>。今、紹介したように、元の文章は三段落に分かれているが、一段落・二段落と、五兵衛の話を中心にした三段落とはそれほど緊密な関係にはない。つまり一・二段落をカットしても、十分に五兵衛のエピソードは理解できるのである。また、最後に付けられた東西の靈魂のありようについてのハーンの見解も、五兵衛のエピソードを際立たせることを第一に考えれば、無くてもいい

部分でだといっていい。実際多くの英語のテキストは、五兵衛のエピソードを中心に編集されているようである。したがって、その時中井が使用した *A Living God* も、すでにハーンの原作を刈り込み、単純に五兵衛のエピソードだけを前面に出したものになっていた可能性もある。

ところで、なぜ中井常蔵が、ハーンの作品をもとにして、国定読本に載せるための教材文を作成しようと考えたのか。それを推測してみよう。

単純に言えば、郷土の偉人を世の中の人に知ってもらいたい、という愛郷意識が彼を衝き動かした、ということが考えられる。モデルとなった浜口儀兵衛は、和歌山県の出身で、この津波の話は紀州有田郡広村での出来事だからである。おまけに彼は、中井の出身校である県立耐久中学校の前身、耐久学舎を創設した人物でもある。こうした愛郷心は、地方在住の多くの教員にとっても、共通した想いであっただろう。というのは、国定教科書に教材が掲載されれば、地方の話も全国版になるからだ。この時の応募作の中では、熊本の「通潤橋」、静岡の「名人元日を知らず（豊田佐吉）」などが、同じような志向を持っていたと思われる。もちろん、それだけではなく、純粋に五兵衛（儀兵衛）の英雄的な行為を顕彰し、それを教育の場に持ち込みたいという思いも強かったはずである。無私精神に立って、人命を救った五兵衛の姿を、ぜひ多くの子どもたちに紹介したい、という願いである。

そして、「稲むらの火」の場合は、それを後押しする格好の条件があった。それは、中井の教材文の背後に隠れている、原作者ハーンの存在である。というのは、このときハーンは、日本人の間で広く読まれる作家になっていたからである。もともとハーンは、自分の文章の読み手として、日本人一般を想定していたわけではない。ハーンの作品は、英文によって書かれ、主としてアメリカやヨーロッパの読書人を想定して出版された。いうまでもないことだがハーンは、英米文学作家なのである。その英米文学作家ハーンの最初の邦訳全集が日本で発売されたのは、1927（昭和2）年、第一書房からであった。一般に、全集が編まれ、それが読者によって購入されるということは、作品の受容という点から見れば、大変なことである。個々の作品集ならともかく、個人の作品の全集が出版されるということは、その作家がメインの作家として社会的に認められたということだからである。では、なぜこの時期、英米文学作家であるハーンの作品が翻訳されて、多くの日本の読者を獲得したのか。それには、日本におけるハーンの受け止められ方についての、概観が必要になる。

## 6. ハーンの受容と「稲むらの火」の虚実

知られているように、小泉八雲、すなわちラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn・1850-1904）は、現在のギリシャで生まれた。ヨーロッパ、アメリカを遍歴し、1890（明治23）年、四十歳のときに来日した。以後、亡くなるまでの十四年間を日本で過ごすことになる。ハーンはもともと、エキゾチックなもの、神秘的なものに対して強い興味を抱く性癖をもっていた。しかし、東洋にロマンを求めて、彼が日本にやって来たとき、日本は急速に近代化を遂げ、また都市化していく変わり目を迎えていた。太田雄三は、そのような

ハーンを「遅れてきたお雇い外国人」だという卓抜な形容でとらえている<sup>(11)</sup>。つまり、彼は古い習俗を残していた明治初期の日本と、文明開化された後の発展期の日本とを同時に視野に入れることの出来たクラークやモースなどの、初代の「お雇い外国人」たちとは違い、世の中が音を立てて都会化していく時期の日本へ「遅れて」やって来たのだというのだ。そうした近代的な都会の光景を見るために、彼は日本へ来たのではない。ハーンが見ようとした、また見たいと思った日本の風俗や文化は、あらかじめ彼のロマンティズムに彩られた、こうあるべきだという枠組みから眺められたのである。すなわち、ハーンは近代化していきつつある目の前のありのままの日本の現実ではなく、まだいくらかは残っていた過去の日本につながる風物や文化に自分の理想を重ね合わせて、それを幻想的な作品として謳い上げたのだ。

したがって、現実の文化状況の中でのハーンは、保守的なナショナリストという役回りにならざるを得ない。なぜなら、過去を詠嘆的に賛美し、伝統を観念的に賞賛するような資質は、現実を急速に近代的に改革していこうとする革新派にとっては、煙たい存在になるからだ。そして、ハーン自身は、庶民の間に伝わる古い日本の習俗や文化を熱烈に賞賛し、そういう日本に惹かれて帰化した文学者だった、という「神話」を残したまま、1904(明治37)年に、この世を去ってしまう。

太田雄三はいう<sup>(12)</sup>。「結局、日本人の多数がハーンの日本についての著作の愛読者になるためには、日本のいっそうの近代化、産業化、都市化などが進み、ハーンの描いたような日本が、半ば消え去った世界として日本人自身にエキゾチックな感じを与えたり、ノスタルジアを感じさせたりするようになるまで待たなければならなかった。」と。その時期が関東大震災(1923・大正12年)以後であることは明白であろう。日本が、国際連盟の脱退(1932・昭和7年)などで国際的に孤立し、偏狭なナショナリズムにとらわれ始めた昭和初期になって、日本の文化や精神の特殊性を強調し、懐旧の想いの中に価値を見出す傾向を持っているハーン作品は、当時の日本人たちによって、新たに「発見」され、高い評価を得るようになっていくのである。それは、ハーン作品がハーン自身の意図を越えて、国家主義の網の目の中に再編成されていく過程でもある<sup>(13)</sup>。彼の全集は、そういう潮流の中で、出版されたのだ。

そしてそれは、まさしく天皇が *A Living God* 「生ける神」として、ますます絶対神になっていく経過とも重なり合っていた。そういえば、生きながら神となった天皇が、自分の分身を「御真影」と称して各地の学校へ下賜し、全国の学校を天皇制の普及と現人神の拝殿にしていた論理は、先ほどハーンがとらえた「人間の心霊や魂というものは、その人が生きている間も、同時に方々にいることのできるものだ」という「日本文化の特質」に見事に符合するではないか。このような受容の姿勢が当時の日本人の背景にあったからこそ、ハーン作品の抜粋である「稲むらの火」も、すんなりと国定読本に迎え入れられたのである。

もっとも、「稲むらの火」に書かれた五兵衛像は、ハーンを目を通して文学的に脚色されたものでもあった。実際の五兵衛、つまり浜口儀兵衛(悟陵)の実像と、このエピソードとは、いささかの懸隔があるのだ。事実上、『濱口悟陵傳』に詳しい<sup>(14)</sup>。それによって、

事実との食い違いを上げてみる。まず、この事件は彼が「老いた五兵衛」ではなく、三四・五歳という壮年時の出来事だったようだ。村には地震や津波がいくども襲来したらしいし、彼の燃やしたのが、実際に稲束だったのかどうかについても、諸説があるようだ。中村圭吾は、事実と教材文とをていねいに比較した上で、浜口儀兵衛（梧陵）の庄屋としての力量は、むしろ農民の側に立って、重税を免れようと様々に画策した、藩政との駆け引きの方にあり、長い人生の「ほんの瞬時の機転にしか過ぎない」この「稲むらの火」の出来事を詮索されるのは迷惑なのではないか、とも述べている<sup>(15)</sup>。また、平川祐弘も、その経緯を比較検討した上で、作品の結びに、浜口大明神が建立されそこに村人がお詣りしているというエピソードは「ハーン好みのフィクション」だ、と述べている<sup>(16)</sup>。

だが、こうしたことは、文部省自身も十分に承知していた。井上監修官は、こういつている<sup>(17)</sup>。「八雲とても、決して正確な事実を調査して執筆したのではなく、おそらく臆気な聞き伝えを元とし、詩人的な想像によって巧みに構想表現したものと思われる。したがって八雲の表現するところと事実とには、かなりの大きな相違がある。」として、その違いのいくつかを具体的に挙げている。しかし、そのうえで「読本教材に取るべきは必ずしも事実でなく、むしろ表現にある」と判断して、この文章を読本に取り上げたのだ。

先ほども触れたが、確かに、教材文「稲むらの火」はうまく書かれている。「これは、ただ事でない。」というつぶやきで、いきなり事件に入ってしまう語り出しが、まず見事である。五兵衛が大事な稲束に火をつけたことの意味が結末になってわかるという構成や、津波が襲ってくる様子の描写なども、八雲の原文に拠ってはいるが、よく整理してある。また、文章の最後の結びも、簡潔で同時に余韻がある。話は、五兵衛個人の感動的な美談として、見事に仕上げられている。多くの人たちの記憶に残っているのも、むべなるかなという気がする。

もっとも、見てきたように「稲むらの火」の教材文は、ハーンの書きたかったであろうテーマ、すなわち五兵衛が、生きながら神になったことには触れていない。たぶん分量の関係で、それを切り落としたのだらうと思われるが、もともと教科書作製者にとっても、その部分は必要がなかったにちがいない。というのは、『小学国語読本』には、他にもたくさん「神」たちが溢れていたからだ。庶民の中に神を見出そうとしたハーンのロマンティックな想像力の世界を越えて、天皇という現人神はむろんのこと、読本のいたるところに、血生臭い軍神たちが、すでに数多く書き込まれていたのだった。「稲むらの火」が読み手に与える感動も、そうした種類の感動と紙一重の所にあったといわなくてはならない。

(未完)

## 注

1, 『小学国語読本』から『初等科国語』の文章への表記の手直しは、次のようである。どの変更も、

教材文を、より子どもに理解しやすくしようとした結果であるように思われる。

ア、漢字を、ひらがなにした。(程→ほど、忽ち→たちまち、松明→たいまつ、など)

イ、送りがなを、変更した。(突立つ→突つ立つ)

ウ、読点を、文脈にそって適切に変えた。(長いゆつたりとした→長い、ゆつたりとした、荒狂つて通る白い恐しい海→荒れくるつて通る、白い、恐しい海、など)

エ、文語調の表現を、よりわかりやすくした。(老いた→年取った、心配げ→心配さうに、猶予は出来ない→ぐづぐづしてはゐられない、とゞろきとを以て→とどろきとで、無言のまゝ→ただまっつて、など)

なお『初等科国語』には、『小学国語読本』に添えられていた二葉の挿し絵はなく、文章だけが教材として提示されている。

- 2, 鈴木道太『ああ国定教科書—怒りと懐かしさをこめて』文化出版局 1970(昭和45)年9月 100~103頁
- 3, 粉川宏『国定教科書』新潮社 1985(昭和60)年10月 165~167頁
- 4, (注8)で紹介する、中井常蔵の当時を追憶した文章に「昭和九年文部省が全国小学校教員を対象に新しい国語と修身の教材を公募するとの発表」という記述があるので、平川祐弘『小泉八雲—西洋脱出の夢』新潮社 1981年1月や、藤富康子『サイタ サイタ サクラガサイタ』朝文社 1990年1月では、それを踏襲している。しかし、文部省による公募は、1943(昭和8)年のことである。また、公募の呼びかけは、「小学校教員」だけに限ったものでもないようだ。たぶん中井自身の記憶違いだろう。また、中井は「幸い当選して新訂国語読本巻十に登載された時には私の応募題名「燃ゆる稲むら」が「稲むらの火」と改められた外は原文そのままで、一字の修正もなく」と記しており、平川、藤富もそれに拠っているが、『文部時報』に発表された中井の入選題は「津浪美談」となっている。
- 5, 国定第四期の「修身」教科書は、次の年、すなわち1934(昭和9)年に刊行されている。したがって、教材の公募の必要性は、「国語」よりも「修身」の方が強かったのではないかと考えることもできる。つまり、「修身」の教材を募集しようという計画に、すでに編纂が進行していた「国語」が追随したのではないか、という推測である。
- 6, 中内敏夫『軍国美談と教科書』岩波新書 1988(昭和63)年8月 64~74頁や、中村紀久二『教科書の社会史』岩波新書 1992(平成4)年6月 194~195頁、参照。
- 7, 応募作と『小学国語読本』の教材とを比定した根拠のいくつかを述べておく。

まず、(韻文)の応募作の「春雨」についてである。これは、巻六の教材「春の雨」である可能性もあるが、井上赳の『国語教科書編集二十五年』1974年・武蔵野書房(50頁)、に次のような記述がある。「巻六の『春の雨』は、浜田広介氏に特にご依頼して作っていただいたものですし、巻九の『母馬子馬』というかわいい詩は、募集によって得た詩ですが、残念ながらその名を私は記憶しておりません。」これにより、『小学国語読本』の「春の雨」は、浜田広介作とする。なお、『日本児童文学大系13 浜田廣介』ほるぷ出版、の年譜(浜田留美編)によると、浜田広介は、1933(昭和8)年11月、文部省から『改訂高等小學唱歌』(全四巻)昭和11年4月刊への協力を依頼されていた。さらに次の年には、「1934(昭和9)年11月、更に文部省の要請により『国語読本』編纂に民間よりただ一名参加、同読本に数編の詩を書く。」(483頁)とある。『小学国語読本』の、他のどの詩が浜田の手になる教材なのか特定はできないが、「春の雨」を含めて、いくつかの詩が彼によって書かれたことになる。

「春雨」に関していうと、巻五の「青葉」も、内容として「春雨」を取り扱っている。したがっ



て、ここでは応募作「春雨」が改題されて「青葉」になったのではないかと、推測しておく。同様に、巻七の「五作じいさん」も、内容から考えて、愛媛からの応募作「納税」の改題ではないと思われる。また、巻八の「自動織機」は、有名な豊田佐吉のエピソードであるが、仕事に熱中して元日に気付かなかったことや、豊田の出身地静岡からの応募であることなどから、これは応募作「名人元日を知らず」だろう。同じく題名の変更では、中井常蔵の「津浪美談」が「稲むらの火」であることは、明らかだし、また、秋田喜三郎の「国語を愛し尊べ」が「国語の力」であることも、はっきりしている。(山本稔『秋田喜三郎研究 創作的国語教育の展開』サンライズ印刷 1992年、135頁)

また、巻四の「ニイサンノ入営」の場合は、岩手から「兄さんの入営」、徳島から「兄さの入営」の応募作品があり、題名だけでは、どちらが採用されたのかはわからない。同様に、巻十「足助次郎重範(文語文)」でも二名の応募者から作品が挙げられている。これもどちらをベースに教材を作成したのかは不明。もっともこの場合は、原拠が「太平記」であるから、当然その原文も参照したであろう。

また、巻十「久田船長」は、東京からの応募作に「船長久田佐助」とあるのが、これに該当すると思われる。しかし、『国語教科書編集二十五年』1974年・武蔵野書房の巻末に掲載されている井上超の書き下ろし教材を列挙した「教材執筆目録」には、井上自身の作として「久田船長」が挙げられている。応募作にかなり手を入れ、井上の創作とっていいような仕上がりになったので、そう記したのかもしれない。そうだとすれば、この応募作は、材料を提供しただけの役割ということになる。同じような例として、巻七「朝顔の日記」に対応するものとして、川越からの「朝顔」がある。これも井上の「教材執筆目録」には、井上の作品ということになっているが、この教材は、児童による観察日記文の体裁をとっているため、全くの井上の創作ということはないはずである。これに対して、一般教材で「加賀の千代」が入選しており、巻十「朝顔」に有名な加賀の千代の俳句が教材化されているケースは、明らかに素材選びのヒントとしての機能を果たただけだろう。

同じ巻十の「朝鮮の田舎」の場合は、「本篇は京城にいられた川村光也氏にお願いして原案を作成して戴いた」と『小学国語読本総合研究 巻十』国語教育学会編 岩波書店 1938年9月 138頁、に井上超が書いている。これは、特定の人物に教材を応募するよう懇請して、入選したケースである。他にもこうした例があったかもしれない。

さらに、「国語読本」で「通潤橋」が、かなり高い評価を得て入選しているが、「修身」の方でも別の応募者の「布田保之助」が当選している。通潤橋を作った人物は布田保之助であるから、両者は同じ素材である。『尋常小學校修身書 巻五』(昭和13年)の「第七 公益」に、このエピソードが取り上げられているので、たぶん、この題材については「修身」の方に譲り、国語読本と同じ題材の重複を避けたのであろう。

- 7, 上野英信『天皇陛下万歳 爆弾三勇士序説』筑摩書房 1971年11月(のち、筑摩文庫)や、中村圭吾『新評判 教科書物語』ノーベル書房 1970年 P245～P266、中内敏夫『軍国美談と教科書』岩波新書 1988年8月 P74～P96、などを参照。

- 8, 二冊の小冊子とは、次の二点である。

①『写本 稲むらの火』

中井の小学校時代の教え子が、彼の還暦祝いに、贈った冊子。内容は、昔、中井が書いた教材「稻むらの火」を、『小学国語読本』から採しだして、英語の副読本にあったラフカディオ・ハーンの *A LIVING GOD* の英文とともに、複写したもの。巻末に「お礼にかえて憶い出を」という題の中井の文章があり、そこに、文部省の公募に応じたこと、ハーンの文章に拠ったことなどが書かれている。1968（昭和43）年11月3日の日付がある。なお、この冊子を送付していただいた南部町歴史編纂室の山本賢氏が、あわせて添えてくださった1969（昭和44）年5月30日の新聞記事によると、この冊子は町民にも、無料で配られたということである。なお中井氏は、2年ほど前になくなられたとうかがった。

## ②『特集 稻むらの火』

総計64頁の冊子。「昭和62年9月国土庁より受賞記念・編者 中井常蔵」と表紙にある。中井の喜寿を祝って刊行したもの。内容は、①の冊子の内容と、①の本を再版（昭和55年）した際に書いた中井の文章と、初版・再版後の世間の反響などを綴った文章とが集成されている。「稻むらの火」をめぐる、総合版とでもいうべき冊子。

- 9, 最近では『小泉八雲作品集』全三巻、河出書房 1977年と、『日本の心』講談社学術文庫 1990年に、平川祐弘の平明闊達な訳文がある。
- 10, ここでの筆者の記述は、(注8)にあげた英文のテキストの複写による。これには出典が記されていないので、どこの出版社によって何時刊行されたのかは不明。もっとも、中井が原拠にしたテキストと、この複写された英語教科書の英文とが、ハーンの原典を同じように編集してあったとは限らないので、中井がカットされていない元のままの *A Living God* を読んだ可能性もある。
- 11, 太田雄三『ラフカディオ・ハーン—虚像と実像—』岩波新書 1994（平成6）年5月 P78～84
- 12, 注11と同じ。P168
- 13, ハーンの現代性は、観念的で純粋なものに価値を見い出すのではなく、混交的なもの、また土着的なものを高く評価するということにあるだろう。「クレオール」という概念が正当に、また肯定的な形で受け入れられようとしている現在、「怪談」や日本心酔の作者ではない、来日以前の作品などに、ハーンの教材としての新しい可能性を見るべきなのかもしれない。
- 14, 『濱口梧陵傳』1920（大正9）年刊・非売品、なおその全文が『濱口梧陵傳』の筆者である杉村広太郎（楚人冠）の『楚人冠全集』第七巻1937（昭和12）年に収められている。ハーンがこの浜口儀兵衛のエピソードをいつ頃、どのような媒体から取材したのかが分かったら、ハーンの文飾や構想の独自性などが解明されるのだが、残念ながら現在のところ、不明である。
- 15, 中村圭吾『新評判教科書物語—国家と教科書と民衆—』ノーベル書房 1970（昭和45）年8月 P233
- 16, 平川祐弘『小泉八雲—西洋脱出の夢』新潮社 1981（昭和56）年1月 P170
- 17, 『小学国語読本総合研究 巻十』国語教育学会編 岩波書店 1938（昭和13）年9月 P120